



岐阜薬科大薬草園

植物の効能 知識育む



岐阜市の北の外れにある
岐阜薬科大薬草園は117

科、約700種の薬草を栽培している。
「局 キハダ 樹皮 苦味健胃整腸」「局毒 ハナトリカブト 塊根 強壯」「カワラケツメイ 全草利尿」。薬草名、使用部位、用途などを記した表示板が敷地内のあちこちに

設置されている。
「局」とは、国が定めた医薬品の規格基準書「日本薬局方」のことで、その植物が医薬品の原料として使われていることを示す。「毒」が併記されているものは作用が強く、一般的には毒の扱いになる。「局」「毒」いずれの表記もないものは、日本薬局方の医薬品の原料ではないが、古くから効能が知られ、民間で服用されてきた薬草だ。



薬草について説明する酒井教授（岐阜市椿洞の岐阜薬科大薬草園で）＝林陽一撮影

Curcuma longa
ロウコン



薬草園で採れたウコン

自宅で栽培して安易に試してみようとするのはお勧めできません。山野草の誤認による植物中毒は後を絶たず、身近な植物での中毒も起きています。薬草園園長の酒井英二・岐阜薬科大教授(57)はそう説明する。薬学部を持つ大学は教育と研究のため、薬草園の設置義務がある。岐阜薬科大の薬草園には希少な植物も

一般公開 ボランティアが案内

多く、季節によっては、日本固有の薬草オウレンや昆虫に寄生するキノコ「冬虫夏草」などを見ること

酒井教授の下で学ぶ同大3年の近藤真由菜さん(20)は、いくつかの薬学部を見学し、薬草園が充実している同大を選んだという。「人間の役に立つ成分を作る植物はすごい。ただ、土壌などをきちんと管理しないと、薬にはなりません。種を守り、薬草の研究を続けていきたい」と、創薬育薬コースを専攻し、月に1、2回は薬草園に足を運ぶ。同大は岐阜市立というところもあり、例年は4月から10月(8月は休園)まで一般公開し、「薬草を学ぶ会」のガイドボランティア約40

人が交代で案内している。月に1回、酒井教授を講師として勉強会を開き、知識の蓄えも欠かせない。

会長の吉田将士さん(55)(愛知県一宮市)は漢方を扱う同大出身の薬剤師だ。「来園者に教えてもらうことも多く、いろんなことを話すのが生きがいになっています」と言う。また、学ぶ会では薬草を利用した草木染やコンニャクづくりなどの活動も行っている。今年度は新型コロナウイルスの影響で休園になり、新年度の方針はまだ決まっていないが、酒井教授は「これからも薬用植物について一層の情報発信の場、皆さんの憩いの場にしていきたい」と語る。(荒川盛也)

岐阜市放棄地で薬用作物

岐阜市によると、天武天皇の時代、百済の僧を美濃国に送り、煎じ薬を作らせたとの記述が日本書紀にあるほか、戦国武将の織田信長が岐阜入城の翌年、伊吹山に薬草園を作らせるなど、岐阜は古くから薬草との関わりが深いという。岐阜薬科大もそうした歴史の流れの中で設置された。

産地化目指し実証栽培

産は1割ほどにとどまる。近年、中国産の価格が上昇し、確保が難しくなる中、国産の需要が高まっている。岐阜市は耕作放棄地の活用、中山間地域の活性化につなげようと、2015年から薬用作物の産地化を目指し、キキョウ、ハトムギなど、5品目の実証栽培を進めている。岐阜薬科大薬草園はその基礎研究も担っている。